令和５年度第２回学校運営協議会報告

県立浜松特別支援学校

１　日時　　令和５年 10 月 13 日（金）　午前 10 時から正午まで

２　参加者

⑴　委員

〇特定非営利活動法人　くらしえん・しごとえん　代表理事　鈴木　修

〇五島地区自治会連合会　会長　鈴木美佐男

〇浜松市危機管理課　課長　小林　正人

〇国立特別支援教育総合研究所　主任研究員　柘植　美文

〇㈱日本マクドナルドフランチャイジー　株式会社フロム東海　代表取締役　山田　晴茂

〇西南障がい者相談支援センター　センター長　後藤翔一朗

⑵　教職員

校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事

中学部主事、高等部主事、教務課長、進路支援課長

情報教育課長、防災課長、ＣＳ担当

３　次第

⑴　開会

ア　校長挨拶

学校応援隊づくりに取り組んでいるが、少しずつ芽が出てきていて、学校の力になってきていると感じる。例えば、ＰＴＡ会長もＰＴＡのあり方を従来の組織から見直している。既に始めていることとして、応援隊をＰＴＡにも取り入れている。例えば、運動会の駐車場係に力を貸してくれる人を会員から募ると、手を挙げてくれる人が複数いる。学校でできることは精一杯やるが、力を借りないとできないこともある。できないことは、「力を貸して。」と発信していくことが、学校を強くしていくことになるのだと感じている。協議会の皆様が、応援のアイディアをたくさん出してくださったことで、応援の在り方や応援を募るやり方を少しずつものにできてきたかと思う。本日もよろしくお願いしたい。

イ　日程説明

⑵　校内参観の感想

・高等部のレザー班の生徒は集中して取り組んでいた。緊張しながらも説明してくれた生徒もいた。よい体験だと思った。（後藤翔一朗氏）

・小中学部、運動会に向けての学習は、子どもたちがウキウキしているのが伝わった。（後藤翔一朗氏）

・レザーのすごく良い製品ができているので、使った人の感想を得る機会があると、きれいに作るのが目的ではなくて、使ってくれる人が喜んでくれるために作るということが分かるのではないか。自社で

も実習をやった人のフィードバックをいただくと、店のチームが喜ぶということがある。（山田晴茂氏）

・楽しそうに活動していた。地道にやっている生徒も楽しみながら活動しているのではないかと思った。

（小林正人氏）

・楽しそうに活動する姿、主体的な姿がたくさんあった。私たちが話し掛けると自然に答えてくれた。このような姿はすぐにできることではなく、日頃から先生方がそのように育てているのだと思う。だから、私たちのような外部とのやりとりができているのだと感じた。私たちとのやりとりができているので地域でも発揮できるのではないかと感じた。（柘植美文氏）

・高校生が受付から会場まで案内してくれた。作業学習の授業でも生徒が始めに説明をしてくれた。まずは体験させることが大事だと思った。また、生徒は静かで落ち着いて学習していて、以前とは違う印象を持った。（鈴木美佐男氏）

⑶　グループ協議

ア　地域学習、防災学習

【地域に本校のことを知ってもらうための取組例】

・今年度はこれまでに、ＰＴＡと協働で読み聞かせボランティア、草取りボランティア、彩ファームさんによる高等部農耕班へ栽培指導、花の会の方と五島協働センター内の花の苗植えに新たに取り組んだ。応援してくれる人が増えている。また、高等部は遠州灘海岸のクリーン作戦、五島協働センターの清掃、浜松江之島高校の清掃など地域に貢献する活動に取り組んだ。その他には、学校運営協議会委員の鈴木修氏、後藤翔一朗氏が本校職員を対象に進路研修会の講師を務めてくれたり、山田晴茂氏は生徒を対象に「先輩から学ぼう」という授業を社員（本校卒業生）と一緒に行ってくれたりした。

（CS 担当）

・いかに地域に特別支援学校のことを知ってもらうかという点で参考になればということで、第１回運営協議会終了後に柘植先生から他校の取組を紹介いただいたことをまずは共有したい。（CS 担当）

→応援隊を地域にたくさん作りたい、それには浜特のことをたくさん知ってもらう必要があるということで、一例として紹介する。私の実家では、学区の家庭に一部ずつカレンダーが配られている。このカレンダーには、自治会、小中学校、保育園の行事が書かれている。実家に帰ったときに、母親が小学校の校外学習の日を知っていたことから、このカレンダーの存在を知った。そして、このような物を通して認知してもらえるのではと思った。残念なのは学区の特別支援学校が入っていないことだ。

（柘植美文氏）

→費用は？（鈴木美佐男）

→市のプランのようだ。（CS 担当）

→回覧板で小学校の月別行事予定というのはあるが、このように一体化されているのは初めて見た。

（小学部主事）

→作ることはあまり難しいことではないが、どこが費用を負担するか。市と県との関係をどのようにすり合わせるかはなかなか難しいかもしれない。（鈴木美佐男氏）

→子どもが学校に通っている間は、学校のことは分かるが、卒業してしまうとなかなか情報が入ってこない。（柘植美文氏）

・中学校、高等学校は生徒のボランティアを推奨している。例えば、社会福祉協議会が進めている寺子屋という学習支援事業に対して、中学校にボランティアを依頼すると学校は参加者を募ってくれる。

（鈴木美佐男氏）

【後期の防災学習計画】

・後期の中学部の防災学習について、中学部では総合的な学習の時間で年間を通して防災教育を行っている。発災後の避難生活を想定した学習が主で、例えば簡易トイレを組み立てたり、教室を暗くしてランタンを使ったりして、非日常を体験する。このように生徒の実態から体験を通した学習をと考えている。（防災課長）
・講話は誰を対象にするのか。（小林正人氏）
・生徒を対象にお願いしたい。生徒は発災後のイメージが弱いので、実際、どのような生活になるのかということがよく分からない。専門家から具体的に教えてもらえるとありがたい。（防災課長）
・職員がうまく説明できるのか分からないので、事前に、打ち合わせが必要だろう。（小林正人氏）
・過去に中学部の避難生活の学習では、テントの設営方法を教員と市の職員の方と一緒に示したり、生徒の設営の様子を見て、最後に講評をいただいたりした。また、防潮堤ができたばかりだったので、模型を見せてもらいながら、実際一緒に見に行ったこともあった。（高等部主事）
・防災学習の講師については、十分話し合いながら進めるようにして協力したい。うちの職員の勉強にもなる。（小林正人氏）
・体験できそうなこととして、例えば、スモークハウスや起震車体験等があり、消防署に連絡すれば可能だろう。また、宿泊を想定して保護者も一緒に泊まってみることも大事。五島地区の社会福祉協議会では、希望する４年生以上の児童の通学合宿を行っている。これは、公民館に宿泊してそこから登校するというものである。また、12 月３日、自治会でも防災の訓練をする。（鈴木美佐男氏）
・12 月第１日曜日は、県下一斉の防災訓練があるが、生徒の地域の訓練の参加状況はどうか。学校だけでなく、地域でも要支援者がいるということを知っていてもらうことが大切なので、できるだけ参加してほしい。（小林正人氏）
・江之島町の訓練では、浜松江之島高校の職員や生徒が参加している。（鈴木美佐男氏）
・中央特別支援学校に勤務していたとき、地域別の班があり、年間、数回集まっている。居住地域の生徒と同じ居住地の教員が一緒に地域の訓練に参加したことがある。自治会長に生徒を紹介して顔を覚えてもらうということをした。車椅子使用の子だったので、その場で、この子を避難させるには大人が３人必要だということを打ち合わせたことがあった。（柘植美文氏）
・地域の小中学生は地域の訓練に参加している。地域にとってもどのような子どもたちがいるのかを把握しておくことは大切。特別支援学校の生徒が参加してもらえるとありがたい。（鈴木美佐男氏）
・たくさん、アイデアをいただいたので、今後に生かしたい。１月の中学部の防災学習では、小林さんにコーディネートしていただいて、11 月頃から講師と打ち合わせを始めていくということでよろしいか。（CS 担当）
・その方向で進めたい。（小林正人氏）
【地域に認められる子、感謝される子の育成】
・地域に認められる子、感謝される子を目指して、どのような力を育てていけばよいのか整理したいと考える。高等部段階では地域に貢献できることに喜びを感じることができることを目指して、今年度は遠州灘海岸や浜松江之島高校の奉仕作業に新たに取り組んだ。高等部を目指し、小学部段階から系統的に分かるものがあるとよいと考えているが、どのように考えればよいだろうか。（CS 担当）
・このような一覧表があるだけで、教員の意識が高まるだろう。高等部で地域に貢献できるということを目指して小中学部で育てていくことは大事だが、無理やりだと長続きしない。今あることを価値づけていくことが大切ではないか。例えば小学部は彩ファームがあって、地域に知っている人がいるとか知っている場所があるというところから始める。そこをきっかけに広がっていくとよい。その前段

階としては、学校の先生や友達と仲良くするということなどがあり、これらのことにつながっていく。江南中と交流しているのであれば、知っている中学生がいるとか。小学部では彩ファームさんを知っているというところから更に知り合いを増やしていくなど、無理なく自然に広がるとよい。

（柘植美文氏）

・地域に貢献するという大きなことでなくてももっと簡単なこともある。自然豊かな地域なので外に出て、挨拶をするだけでもいいし、何しているのかと声をかけてもらえるだけでもいい。畑で仕事をしている人もいるだろう。「ちょっとやらせてよ。」など気軽に声を掛けてもらえると、「じゃあ、やってみたら。」と地域の人も声を掛けてくれる。そういうことから地元に認知されていく。例えば、10月14日、15日と祭りがある。餅投げ、甘酒などのイベントがある。どんどん来てもらいたい。自然発生的に地域と関われるのが望ましい。（鈴木美佐男氏）

・近隣に中学校があるが交流はあるか。（小林正人氏）

・本校中学部との交流を1年生が行っている。昨年度の交流で次年度も交流したいと本校の生徒から声が上がり今年度も交流することになった。他にも、中学校の体育大会の応援合戦を参観して審査員になって投票するなどの交流がある。（CS担当）

・この子たちが江南中に行くだけでそれが貢献になる。江南中の生徒の障がい理解が進む。これは、インクルーシブ社会の実現につながる。（柘植美文氏）

・そういった交流を進めていくことが、地域に認められるということになるのではないか。（小林正人氏）

・学校周辺に道路を作る計画が進んでいるが、整備が進められれば、３つの学校の往来がよりスムーズになるだろう。道路の建設の意図の中には、学校間のつながりということも含む。（鈴木美佐男氏）

イ　進路学習

【参観の感想】

・高等部の作業学習では、生徒は集中して楽しそうだった。また、緊張している様子だったが、生徒が我々に作業製品について説明してくれた。良い経験になったのではないかと思う。また、小学部、中学部の運動会に向けての学習では、ウキウキして楽しそうで、こちらもウキウキした。（後藤翔一朗氏）

・革製品は個人的に好きで使っている。使っている人の感想等を取っているのか。きれいに作ることが目的ではなく、使ってくれる人が喜んでもらっているということが分かると良いのではないか。

（山田晴茂氏）

・買ってもらったときにアンケートを行うことはあるが、追跡してというのは取り組んだことがあるかはよく分からない。（進路支援課長）

・難しいことだとは思うが、使われているというフィードバックがあると良いのではと思った。我々も実習を行った人からのフィードバックがあると、店のメンバーが喜ぶ。（山田晴茂氏）

・運動会のようなイベントは盛り上がりが違う。みんな乗ってやっていた。（山田晴茂氏）

・過日、城北分校の作業学習を３時間ずっと参観した。いつもの参観では見えないことが長時間の参観でよく分かった。機会があればそのようなこともできると良い。（鈴木修氏）

・学校は楽しい、面白い、良かったということを十分経験させるのがベースである。（鈴木修氏）

・今年は応援団を募り、昼休みに練習する生徒もいて、盛り上がっている。（中学部主事）

【企業向け学校見学会の反省】

・参加者24人。昨年度よりも若干少ない。就業促進協議会が主催していてその総会の場でも協議した。今年はハローワークから配信してもらうようにしたが、アナウンスが遅かったかもしれない。他校も同程度の参加人数だった。参加した方からの感想は好評で、見学の時間を長くしたことが理由の一つ

だと思う。毎回同じ課題になるが、情報をどう伝えていくかである。（進路支援課長）

【学校運営協議会委員の活動】

・鈴木修さん、後藤翔一朗さんが夏季休業中に本校職員向けての研修会を実施した。本研修会は希望制としたが中学部で７割、小学部も多数参加した。参観者のアンケートでは、福祉や企業について、基礎的なことが聞けて良かったや、小中学部の教員にとって企業で働くことは身近に感じることは少ないため勉強になった等の感想があった。講話と共に実際に見学することも有効だというような意見もあった。（進路支援課長）

・先輩から学ぶというタイトルで、山田晴茂さんと山田さんのマクドナルドに務めている本校卒業生が講師となり、進路学習会を行った。参加者は１年から３年の一般企業を希望している生徒だった。３年生の感想からは、働くということを自分のこととして意識している様子や働くことへの憧れを持った生徒がいたことが伝わった。教員が話すよりも説得力があった。卒業生は「お客様のことを第一に考えて」ということを繰り返し言っていたので、生徒は何のために働くかということを考える良い機会になった。（進路支援課長）

・福祉サービスの説明を他の職員とした。アンケートにもあるが、見学して生の空気感を御覧いただくのが良いだろうと思うが、なかなか難しい面もある。この研修会は基本的な内容で、それに加えて相談員の立場で大切にしていることを話した。今後は西区、南区あたりには声を掛けることができる。（後藤翔一朗氏）

・以前、福祉事業所フェアで、ミニ講座に保護者があふれていた。学校も基本的な情報を保護者に伝える機会があるといいなと感じた。学校の進路ガイダンス、進路指導ではなかなかそこまでは難しい。福祉のことについて保護者向けに説明する機会があると良い。（進路支援課長）

・過去には発達支援級の保護者向けの説明を行ったことがあるので、できると思う。（後藤翔一朗氏）

・よく考えると、福祉面についての正しい情報を流す機会はあまりなかった。（進路支援課長）

・他校では依頼を受けて、30 分だけのミニ研修会を行っている。雇用率はどのように計算しているのかや、障害者雇用率ってなぜ上がっているのか、または、作業分析・作業工程分析など、実習に向けて何を見たらい良いのか等についてシリーズ化して伝えることもできる。分からないことや知りたいことを言ってくれれば我々は動くと思う。（鈴木修氏）

・後藤さんや山田さんのお話を委員にアナウンスしてほしかった。（鈴木修氏）

・講師の「先輩」はいつもと全く違う感じだった。「学校の時は迷惑を掛けたが、学校の時がとても良かった。」と言っていた。生徒の前で話すことで「先輩」もモチベーションが高かった。全員の前であれだけ話すとは思わなかった。卒業生が話すということが意味あること。マックとは限らず先輩講座のようなものは定期化してはどうか。（山田晴茂氏）

・学校としてはとても良かったので続けたい。（進路支援課長）

・企業だと同じ仕事になってしまい、どうしてもマンネリ化してしまう。このような機会があることで講師の二人の目の輝きが違った。（山田晴茂氏）

・「実習は不安だったけど、実習を積んだから社会に出て働くときに役立った。」と卒業生の「先輩」が話していたが、生徒はそれを受けて実習を頑張ろうと思ったようだ。（教頭）

・後藤さんと鈴木さんの話も大変参考になった。本校の職員は今の指導が社会でどのように生きるのかということを知りたいのだが、例えば、挨拶について元気に挨拶したら職場で声が大きいと言われた等のエピソードを聞き、場をわきまえた行動がとれるように指導することの大切さを学ぶことができた。（教頭）

・中学部は職員のこれらの研修会への参加率が高かった。保護者面談で進路について一緒に考えたいと相談を行っているが、進路支援を進める上で大変参考になったと言っていた。（中学部主事）
・先輩講座での感想が高１よりも高３の方が現実的な感想に変わってくるということは良いことだと思うので、継続して行ってほしい。（情報教育課長）
・「学校時代は迷惑かけたけど、本当に良かった。」と話していたようだが、そのように言ってもらえることは教師冥利に尽きるのではないか。参観した運動会でも楽しそうだったが楽しい経験、うれしいこと等はしんどいときに踏ん張ることができる力になる。学校時代はすごく大事な経験。（鈴木修氏）
・就労に関わる中でポキッとなってしまうことがあるが、そういった方の生活経験の傾向として楽しい経験をしていることが圧倒的に少ないということがある。（後藤翔一朗氏）
・保護者からの相談の中で、答えに困ることがあると思う。問答集等、先生方も対応の目安になるものがあるとよいのではないか。困った事例集などもできそう。（鈴木修氏）
・企業も社員の保護者から意見や苦情のようなものがあるが、受け身になると受け身になってしまうが、強く出ると問題になるのではないかと委縮してしまう。話を聞いて、正しいことはきちんと伝えることも大切だと感じる。そういったことは学校ではなかなか難しいこともあるだろう。（山田晴茂氏）
・進路のことに関して、生徒の実態として難しいのではないかと思うこともあるが、保護者の希望が強い場合、学校からのアドバイスはなかなか難しいと感じることがある。（中学部主事）
・そのようなときに専門家の意見を伝える等の方法があるかもしれない。（鈴木修氏）
・企業は難しいと言える。そういうことがはっきり言える。（山田晴茂氏）
・企業は実習の評価表で悩むときがある。どうしても頑張ったところを我々は書きたい。学校は厳しく評価してほしいと言われるが教育的に迷うときがある。評価表はチェック項目ではなく、良いところ３点、改善点３点等記入できるとよい。ウイークポイントとストロングポイントを絞って捉えるのはどうか。（山田晴茂氏）
・生徒向けの評価表と保護者や学校へ通知する評価表とを分けてもいいかもしれない。（鈴木修氏）
・挨拶一つとっても、態度に差がある。そういった方も実習中に変わっていけば可能性はある。企業は要望する内容を明確にしても良いかもしれない。（山田晴茂氏）
・会社側から見た評価の視点が分かるだけでも参考になる。（進路支援課長）
・ちなみに山田さんのところでのアセスメントとかアルバイト生への評価項目はあるのか。逆にそれを学校向けに提供してもらうということはどうか。（鈴木修氏）
・アルバイトとかパートタイマーの評価表はある。（山田晴茂氏）
・そういうものを見せてもらうだけで、企業が大事にしていることが分かるので参考になる。
（進路支援課長）
・企業で大事にすることを項目のチェックではなく、記入式にしてできるのではないか。（鈴木修氏）
・就労訓練の相談を受けることもあり、これは難しいのではないかと思っても、判断はこちらではしないで、まずは、見学や体験をとおして、相手に評価してもらうようにしている。それを踏まえて、次の進路先を相談するようにしている。（後藤翔一朗氏）

【今後に向けて】
・講座をアーカイブ化して限定して保護者も聴講できるようなものができていくというのもよい。夏の講座も、今回はこちらからの発信だったが、先生方からの質問に答えるということなどの内容もよいかもしれない。（鈴木修氏）
・生徒への先輩学は次年度も継続したい。先輩学の講座は他の企業にも声を掛けていく。今回も他の方

にも広げても良かったと思う。（進路支援課長）

・あまり人数が多いと「先輩」が委縮する。人数はちょうどよかった。（山田晴茂氏）

ウ　総評　（鈴木修氏）

昨年度から今年にかけて着実に前に進んでいる感じがする。

学校は、うれしいとか楽しいとか、良かったということがベースになっていないとだめで、それには先生方が委縮してはだめ。先生方が生き生き、伸び伸びしていないとだめだと思う。

我々は情報をたくさん持っている。我々を大いに使ってほしい。どのようなことでもよいので言ってほしい。例えば、保護者との関わりでは、外部の専門家の意見を取り入れて、「～のことについては専門の方がこのように言っていた。」と説明するなどである。できないことはできないと言うので、何でもいいので行ってきてほしい。

→たくさんの話がでた。少しずつ前に進んでいる。学校が求めていることを発信していかなくてはいけないと感じると共に、委員の方からたくさんの意見やアイデアをいただいた。少しずつ応援が広がっている。（副校長）

⑷　閉会　（司会：副校長）

ア　校長挨拶

２グループの協議を聞いて、地域、地域の人、地域の専門家等、どのように関わって取り込み、どのように学校の力にするのか、あるいは子どもの成長につながるのかということについて、それぞれの立場から多くヒントをいただくことができた。これからできそうなことについて、ひらめきも獲得できた。

先ほどから話にあるように、今までよりも地域の力を取り入れて学校は力を付けていると思う。もっともっと上を目指しているので今後とも力を貸していただきたい。

４　連絡

第３回　学校運営協議会 開催日時　令和６年２月 29 日（木）14:30～16:30